史料紹介

天保十一年　御用留

解　題

後藤重巳
榎並賢悟

先号から掲載をはじめた史料「御用留」は、今回は天保十一年分の翻刻となる。

本史料の所属する史料群については、既に先号であらかたの紹介を終わっているので重複を避けてここでは省略する。但し、先の解説ではやや不的確な指摘に終わっている部分があるので、その点について改めて説明したい。

すなわち、「御用留」には、筋内の庄屋各自の「留書」と筋内庄屋総代（筋代庄屋）の「留書」とがあり、後者が「筋代御用留」「御用談日記」「御用談記」などと呼ばれ、小庄屋の連合寄合である「筋寄」に関わる記録ないし用留である。

前者の保管は各庄屋であるが、後者には何らかの申し合わせがあって、その保管は特定の庄屋でなく、筋内の庄屋が分散的に保管する方法が取られた。筋内庄屋の寄合の場所は、詳細は不明ながらも恐らくは輪番的に行われたものと思われ、その折の用談記録はその座元の庄屋に保管されたものらしい。安政六年の御用談日記の表紙裏には「覚」として

壱番　一、御用談記　壱冊　五馬市謙平方へ預置、
弐番　一、同　壱冊　芋作又市方へ預り置、
参番　一、同　壱冊　塚田俊左衛門方へ預置

と記され、表紙に「四番」と記された安政六年の御用談記が、五馬市文書群の内に含まれている。この筋内庄屋の寄合は、「出会」とも呼ばれたものなのか記録の中には、「五馬市信作宅出会」と表現されている。

さて、本天保十一年の「御用留」は、表紙に「弐番」とあり、表紙裏に「庄屋　信作」の署名があり、五馬市庄屋の「御用留」と思われる。本文書き出しは「覚」で、前年十二月二日、老中松平和泉守乗寛死去に関わる勘定奉行遠山左衛門尉景元らの書付写を、正月十一日日付で日田役所から触れ出した内容である。続いて「前々被仰出候御法度」を遵守すべき趣を数行で簡略に述べ、留書に移っている。

内容については、仔細に翻刻されるのでそれに譲るが、先号同様に長崎廻米に関わる記事が多く、その他、先支配日田高木代官時代からの物価高騰に伴う支出経費の増大で、日田掛屋丸屋からの借立に関する記事などが見える。

この留書の料紙も、その大半を「宗門改帳」の裏紙（紙背）を利用している。利用された宗門改帳は、五馬市村文化六年正月調製の帳であり、表裏表紙共六十五丁の内、五十丁を占めている。残る部分は取立に関わる長帳の再利用である。

校訂に際しては、可能な限り原本の体裁に従ったが、組本の都合上、意に沿わない部分も少なくない。記事中の解読困難・不鮮明な文字については、「　」で示し、判読したものには（カ）と付した。

本史料の解読に当たっても、榎並賢吾君（平成十年卒業・現在長崎市教育委員会勤務）の労苦に負うところが大きいことを明記して労に謝する。

（十二年四月　後藤重巳　記）

（表紙）

天保十一年

弐番

御用留

子正月

日田郡

五馬市村

（タテ　二四・五㎝、ヨコ一八・五㎝）

覚

松平和泉守殿卒去ニ付、鳴物は今日ゟ三日停止、普請は不苦ハ、

十二月二日

右之通御書付出ハ間、写遣しハ、可被得其意ハ、以上、

十二月二日　　遠　左衛門尉
深　遠江守
明　飛騨守
内　隼人正

右之通、御書付出ハ間、写遣しハ、得其意廻状披見、当月ゟ鳴物は三日停止、普請は不苦ハ、右之趣、小前末ミ迄不洩様申通、此廻状昼夜刻付を以、早ミ順達、留村ゟ可相返もの也、

子正月十一日、日田御役所　印

申下刻出ス　新城村ゟ十八日午下刻受取
即刻小五馬市村江継立申ハ、

前ミ被　仰出ハ御法度之趣并五人組帳ヶ条書之通、弥相守ハ儀は勿論、婚礼之節水掛之類其外、喧嘩口論相不致、忠孝を相励、農業を出精いたし、万事費を省き、倹約第一ニ心懸ヶハ様可申教ハ、但此外ヶ条書例年之通

日田
六日　御役所　印　正月十八日新城村ゟ請取、十九日小五馬村江継立申ハ、

子正月

其御村ミ高松御調達銀御拝借返納、去ル酉戌両年分、小手形御引替ニ付、御受取書御渡ニ相成ハ分、取集、二月納入用御上納之節、無失念御持参御出勤可被成ハ、此段被仰渡ハ間、申進ハ、承知之上此状早ミ御継立可被成ハ、已上、

子正月晦日　　会所　印

二月二日続木ゟ受取即刻新城江継立申ハ、

一、銀百六匁壱分三厘　　五馬市村

右は去亥御年貢銀取立銀高江掛リハ納入用、凡積銀壱貫目ニ付、銀拾五匁宛取立ハ条、来月十四日・十五日之内急度上納可致ハ、尤納済之上取立過不足有之ハハ、追而可相触条、其旨相心得可申ハ、廻状村下庄屋令請印、早ミ順達、留村ゟ可相返者也、

子正月廿九日、　日田御役所　二月四日新城ゟ請取
即刻小五馬江継立申ハ、
五馬市村

一、米八石六升四合　口米
　　此欠米　弐斗四升二合
〆米　八石三斗六合
　　代銀　六百九拾目五分四厘
　外銀　拾匁三分六厘　　積立納入用

右は其村〻去亥御年貢御口米御年限中、正米江戸御廻米買替納代銀并積立納入用共、書面之通割賦相触ハ条、来ル二月十四日・十五日両日之内、急度可相納ハ、此廻状村名下庄屋令請印、早〻順達、留リ村ゟ可相返もの也、

子正月廿九日日田御役所　印　二月四日新城ゟ請取
五馬市村留

先達而申談置保、大原宮ニおいて額披露并五穀成就御祈祷之儀、此節御停止ニ付、日送、来ル三月朔日ゟ三日迄御祈祷被　仰付ハ、右ニ付、小前一統賑〻敷参詣いたしハ様御取計可被成、尤家別拾弐銅之儀、銘〻神納致ハ而者社中相分兼ハ間、右ニ付小前取集一同村限御神納可被成ハ、右之段其御筋内へ村〻江割付ヲ以、早〻御申触被成ハ、右申進ハ、已上、

子三月十二日　　会所印
村〻

御台様薨去ニ付、今日ゟ普譜・鳴物停止ハ間、得其意可被相触ハ、日数之儀は追而可相達ハ、

正月廿四日

右之通御書付出ハ間、写遣しハ、可被得其意ハ、以上、

内　隼人正
明　飛騨守
深　遠江守
遠　左衛門尉

御台様薨去ニ付、普譜は来ル晦日迄、鳴物は来月八日迄停止ハ間、得其意可被相触ハ、

正月廿七日

右之通御書付出ハ間、写遣しハ、可被得其ハ、以上、

正月廿七日　　内　隼人正
明　飛弾守

深　遠江守
遠　左衛門尉

右之通御書付出ル間、写遣シル、得其意廻状披見、当日ヶ普譜は七日、鳴物は十五日停止たるへく候、右之趣小前末ミ迄不浅様申通、此廻状昼夜刻付を以、早ミ順達、留村ヶ可相返もの也、

子二月十日未ノ上刻、日田御役所　印　庄屋
未ノ上刻　苗代部村始高取留
二月十五日新城村江申刻請取、組頭
十六日巳刻小五馬村江継立申ル、百姓代

子二月朔日用談

一、於　大原宮五穀成就祈祷額披露并当月十三日ヶ十五日迄三日三夜祭礼、日限之内小前一統参詣之事、但、以家別拾銅村ミ御初穂取計、其外者仰心次第可取計事、

一、長崎詰ヶ申越ル当年御蔵納捗取不申ル、正月迄六千石内外相済、欠減不少、未タ両郡ニ而、壱万石内外滞船ニ相成、是迄之処見合ル而は四月末迄可相懸、右ニ而は欠減并入用弥増郡方難渋ニ付、御蔵掛江内入用取計方申談候上、可申越段懸合来ル間、御掛リ安藤様迄御内分相伺置ル、右は長崎御詰御出役様ヶも、御用分当御役所江御掛合ニ相成、御同意被　仰越ル趣之事、右ニ付、取計方申談、早ミ申遣度事、

一、銀三百四拾五匁六分
是は、去亥御年貢三納御銀三分通年延御願之節、金拾両御元〆様肴料取計、同郡割合日田郡出分并当子三月御上納之節割賦相廻ル事、
右之通申談ル、以上、
子二月三日　桜竹新三郎　印

子二月廿日用談　筋代

一、丁銭四百七拾貫百弐文
是は、去ル酉八月ヶ呉崎新田外囲取繕入用并去ミ戌二月中　殿様御見分入用、其外去亥五月迄入用辻、郡ミ割賦、日田郡出分如斯、

一、金弐拾両
是は、去亥年呉崎新田作付之分冥加米為差出ル入用

并諸入用共惣代持参金入用辻、

一、金三拾両

是は、当子呉崎御普譜ニ付、惣代罷越ハ入江兼平、万々金六右衛門、中嶋「　」二持参金日田郡出分凡積リ、

丁銭四百七拾貫百弐文

合、此銀四貫弐百七拾三匁六分五厘

金五拾両

此銀　三貫目

〆銀七貫弐百七拾三匁六分五厘

此割高　弐万五千三百拾七石弐斗九升七合

但　高壱石ニ付

銀弐分八厘八毛内

是は、当子三月十四日・十五日郡中入用一同相納ハ事、

右之通申談、承知致ハ、以上、

子二月廿日　　筋代中

覚

一、囲堤破損所取繕ひ方之事

御見分之上難捨置大破之場所、小石・ねば土ヲ以取繕ひ、小破之場所、石炭からヲ以取繕ひ仕度奉存ハ、

一、入百姓共家作之事

相応之人当入作願出ハハ、呉崎出張之上申談、家作可仕ハ様奉存ハ、

一、悪水堀之事

出来仕ハ様、奉存ハ、

一、一文字雲入圦新規仕立ハ事

石工弥平積書、別紙ヲ以、奉申上ハ、

一、小三郎受所囲堤破損所組入込之事

惣郡御普譜ニ御組込被下置度、別紙願書奉差上ハ、

一、圦番取極之事

呉崎出張之上、人当相撰、取極度奉存ハ、

一、仕立中賄諸入用差支無之哉之事

作積を以郡限借立持参仕ハ、国東郡之儀は、出張之上、惣代呼出可申談之事、

一、賃銭渡方受払并諸色方人当取極之事

万々金六右衛門ニ相極度奉存ハ、

一、内川ニ而漁業之事

呉崎ニ而運上銀入札之上、人当内糺(カ)仕、取極度奉存ハ、

一、常盤是迄猥ニ伐取申ハ、以来土手三十間欠五十間欠境分ケ致、運上銀取極鬮取ヲ以、百姓共場所分仕ハ様仕度奉存ハ、

右箇条之趣、申談ハ処、書面之通御座ハ、此段奉伺ハ、以上、

子二月十九日　　入江村庄屋　兼平　　松木村庄屋　弥兵衛

用松村庄屋　瀬兵衛　　中嶋村庄屋　信治

上井手村庄屋　惣右衛門　　万々全村庄屋　六右衛門

藤山村庄屋　貫平　　渡理村庄屋　源平

新開方御役所

今般蔵太悴寺西直次郎儀、御役見習被仰付ハ条、可得其意ハ、廻状刻付を以、早ミ順達、留村より可相返もの也、

子二月廿一日、日田御役所　印　　巳上

刻付　二月廿三日巳上刻、新城村ゟ請取
巳下刻、小五馬村江継立申ハ、

一、丁銭拾九貫八百六拾八文　　五馬市村

右は、当子郡中入用前割書面之通相触ハ上、来ル三月十四日・十五日両日之内、丸屋幸右衛門預リ書を以、可相納ハ、此廻状村下庄屋令請印、早ミ順達留リ村ゟ可相返もの也、

子二月日田御役所　印

三月三日出口村ゟ請取、
桜竹始芋作留リ、

一、銀弐百拾壱匁九分弐厘　　五馬市村

外銀、拾匁八厘　去亥三納三歩通年延入用

四月十六日納

右は去ル酉ゟ去亥年迄、呉崎新開外囲損所取繕并新樋御居込中、御出役御出張御賄入用且　御郡代様、去ミ戌二

月新開場御見分御越入用、其外当子御普請中惣代持参金共筋代申談、書面之通割賦相触候間、三月十四日・十五日丸屋幸右衛門預リ書を以、御納可被成ハ、此廻状御受印被成、早ミ順達可被成ハ、已上、

子二月　　会所　印

右同断之事

去亥御年貢三納御銀御触之内、七分通相納ハ残三分通之儀、来ル三月十四日・十五日両日之内急度御上納可被成ハ、此段厳重被仰渡ハ間、聊無遅滞、右日限相納ハ様可被成ハ、村ミ共承知之上、令請印早ミ順達、留リ村ゟ御返し可被成ハ、已上、

子二月廿六日　　会所　印

桜竹始芋作留

覚

一、金八拾四両三歩三朱　銀弐匁八分三厘八毛

此利金、弐両弐歩三朱　銀壱匁九分弐厘

〆金八拾七両弐歩弐朱　銀四匁七分五厘八毛

内

金五両　松田様江御取計物　金拾両　日田・玖珠支配割、日田郡出分如斯、

同三両弐歩　原様江御取計物　金七両　右同断

残金、七拾九両弐朱　銀四匁七分五厘八毛

此銀、四貫七百五拾弐匁弐分五厘八毛

此割高　御米壱万百五拾石

但、御米壱石ニ付、銀四分六厘八毛弐壱

右は日田郡去戌長崎御廻米御蔵納御刎米拂代并船頭并米代取立納入用過銀、書面之通御下渡被成下、難有一村限奉受取ハ、依之村ミ惣代連印受取書証文奉差上ハ、以上、

亥十一月子三月十七日　　会所控写

覚

一、銀七拾壱匁三分五厘　五馬市村

四月十六日納

一、同八拾目三分四厘　出口村

一、同五拾五匁五分五厘　塚田村

一、同六拾目七厘　本城村
一、同四拾四匁三分　桜竹村
一、同弐拾六匁八分壱厘　新城村
一、同拾匁八分二厘　芋作村
〆銀三百四拾九匁弐分四厘
是は去ミ戌長崎御廻米御蔵納御刎米其外
御払物代割返御米高壱石ニ付、四分六厘八毛弐壱
内
銀五拾五匁七分九厘　桜竹村
外、銀弐匁六分五厘
同百拾五匁六分弐厘　本城村
同五匁五分
同五拾六匁五分三厘　新城村
同弐匁六分九厘
同百五匁八分三厘　塚田村
同五匁三厘
同百七拾三匁五厘　出口村
同八匁弐分三厘
同弐百拾壱匁九分弐厘　五馬市村
同拾匁八厘
同弐拾壱匁五分弐厘　芋作村
同壱匁弐厘
〆銀七百七拾五匁四分六厘
是は、去ル酉ゟ呉崎新開入用、先達而割賦相触
之分
差引
銀四百弐拾六匁弐分弐厘　不足
是は、御筋内ゟ御上納可被成ハ分
右之通り御勘定可仕ハ、書面不足銀御上納之上、一村限
受取書相渡可申ハ、以上、
子三月　会所　印
信作殿控へ

覚

一、人足四人
弐人　駕籠壱挺
内壱人　両懸壱荷
壱人　絵板持

右は、当子宗門絵踏・貯穀改就御用、我等儀、明後十八日明六つ時、日田陣屋出立致廻村ゟ条、諸事例年之通相心得、且八拾歳以上之老人は罷出ゟ共留守居いたしゟ共勝手次第ニゟ、若病気等ニゟハハ、看病之もの壱人之分は病人帳差出、他出之ものは成丈呼戻し、無拠分は壱人別取調、他出帳三役人并五人組印形を以可差出ゟ、尤年〻引続他出等之分、断難相立ゟ間、急度呼戻し可申ゟ、且人足継渡、船川越止宿等、無差支様取計、此先触早〻継送、留リ村ゟ日田御役所江可被相返ゟ、以上、

寺西蔵太手前

子三月十六日　原健平　印

「朱書」　「朱書」

「三月十八日　御休竹健分」

南高瀬村　西高瀬村　北高瀬村　上野村

「十八日泊御村所見分」

寺内村　小畑村　石井村　佐古村

「十九日」　「十九日休」　「御林竹見分」

川下村　北内川野村　南内川野村　山手村

「同日泊」　「同十八日休」「同泊」　「同廿一日」

堂尾村　柚木村　大野村　明石村

「廿一日休」　「同廿二日」

中面村　梅野村　栃原村　川原村

「廿二日休」「同泊」　「同廿三日」

野田村　鎌手村　小五馬村　栗林村

「同休」　「女三日泊」

万〻金村　高取村　続木村　五馬市村

「同廿四日」　「休御林竹見分」

新城村　芋作村　出口村　塚田村

「廿四日泊」　「同廿五日」

本城村　桜竹村　赤岩村　湯山村

「同泊」　「同廿六日」

柚野木村　大鳥村　女子畑村　苗代部村

右村〻庄屋組中

追而休泊有之は、御定之木、銭米代相拂ゟ条、上下三人分賄用意可有之ゟ、已上、

覚

一、玉子百弐拾　代七百弐拾文　子三月廿一日

六文替　御会所ゟ肝煎請取

覚

一、米百三拾八石　納不足

内

米七拾九石九斗四升　玖珠郡

残リ米五拾八石六升　日田郡出分

代銀三〆三百拾匁

一、銀ハ貫八百九拾三匁五分八厘

是は、凡積長崎詰方申越ル分

内

銀壱貫七百拾匁　前渡

残壱貫七百拾三匁　此節出分

銀五貫四百七拾壱　日田郡出分

内

銀弐貫三百四拾壱匁　前渡

残三貫百三拾匁　此節出分

〆銀六貫四百四拾目　日田郡出分

此金百七両壱分弐朱

外ニ銀四百三拾匁　用達給

是は、御米高ニ不拘郡中入用方可仕向分

右は日田郡割合

覚

一金七両三歩弐朱　奥五馬筋

代丁銭五拾三貫八百六拾五文

御米高七百六拾四石九斗八升四合ニ割

一、御米本欠　百石三斗七升九合　桜竹

一、同　百三拾六石弐斗四合　本城

一、同　百石三石六升六合　塚田

一、同　百八拾弐石三斗　出口

一、同　五拾石九斗弐合　新城

一、同　弐拾石壱斗弐升壱合　芋作

一、同　百六拾弐石三斗弐升弐合五馬市

〆御米高貫　七百六拾四石九斗八升四合

合　五拾三貫八百六拾六匁　壱文掛出

右は、先日筋代御用相勤ル儀、本城村ニ而御談申上ル長崎御廻米欠減并諸入用会所方参ル帳面ヲ以、割賦仕相廻

し候間、明廿八日迄出口村江向御納可被成候、差懸り候
儀ニ付、無御延引御仕向可被成候、以上、
子三月廿七日　本城良平　印
出口弥惣治
桜竹始筋内出　留

右は、去ル酉ゟ当子迄、呉崎新開去亥三納三歩通、年延
願入用共、三月十四日・十五日両日納有之候処、其御村々
今以御納不被成、右新開差向方差支候間、此者着次第、
早々御納可被成候、此上御納不被成候得は、御役所江御
願可申上候、此段御承知可被成候、此者飛脚賃銭御渡し
可被成候、已上、
子四月十日　会所　印
本城、新城、塚田、出口、五馬市、宇佐
右村々飛脚賃六匁宛

惣村立会極書之事

一、高八石三升七合　当子迄伝六　持　分
比内
五石七升五合　川原組ゟ質物之分
此節差返ス極メ
五斗四升七合　下駄組ゟ質物之分
右同断
五升　栃井組江返ス、
壱斗三升　川原組伝七江戻ス、
是者、伝六ゟ人落ニ相成、此節調見候処相
違無御座候、
六斗　八久保組勘蔵江
売渡ス分、
四斗九升八合　本組吉兵衛へ売渡ス、
七升　下駄組源兵衛ニ売渡ス、
六升壱合　古賀源三郎ニ拾ヶ年限
売渡候田地残高此節
可入候事、
〆七石六斗六升三合
残高三斗七升四合　当子年ゟ伝六持高ニ成、

右之通伝六所持致候処、年〻御上納銀相滞、当月迄之〆
辻丁銭六拾三貫七百四拾三文有之候処、伝六悴新吉何分

返済方出来不申、右高所持致居ゟ而は、後日村方迷惑ニ相成ゟ間、此節惣村立会之上、高書面之通取計仕ゟ処、相違無御座ゟ、仍而村方惣代立会人加判仕、差出置ゟ処如件、

天保十一子年四月十一日　五馬市村山口利右衛門印

下毛　目の上ミ　宇土　川原
品右衛門　平三郎　元右衛門　要助　正左衛門

川原　同　同　八久保　下田
伝七　善右衛門　由右衛門　勘蔵　安右衛門

組頭　同　同　同
源兵衛　伝兵衛　平右衛門　選右衛門

同村庄屋
信作殿

申談覚

一、若殿様御入郡ニ付、郡〻惣代小倉迄御出迎之儀人当取極置、御沙汰次第可罷越事、

一、高木様御支配之節ゟ諸色高直ニ付、郡中入用元銭引足不申、先役中丸屋借リ立、去ル七月証文差入ゟ儘返済方等閑ニ付、証文写を以丸屋ゟ歎キ出ゟ趣、右返済方松田様ゟ御同意ニ付、此節郡〻取立方申談ゟ事、

但、借用銭之内、郡中入用取立当りを以、当子五月十四日・十五日両日之内、取立ゟ積リ申談之事

一、若殿様最早御入郡ニ付、餘時御普譜入用其外御忍賄入用等も相懸り、前書丸屋かり立仕法付不申ゟ而ハ、非常入用かり立等差支ゟ間、此段申談ゟ事、

右之通申談ゟ事、

子四月十九日　郡〻惣代庄屋

借用銭証文之事

一、丁銭千八百六拾壱文　当亥七月元

是は、去ル天保七申六月ゟ当六月迄高木様御支配中、餘時入用御受代ニ付、御賄入用其外定式等米穀并諸色高直ニ付、入用相増、違作ニ付、餘時入用仕上辻御切手御渡し相成ゟ処、郡中入用御取立元銭無之御取替被下ゟ分、

一、同千七百六拾貫百八拾七文　但亥七月元

是は、去ル酉六月ゟ去戌六月迄当　御支配御入

郡ゟ餘時入用其外右同断、諸色直段高直ニ付、入用相増、仕上辻郡中入用元銭無之御取替被下ル分、合丁銭弐千七百六拾壱貫四拾八文　亥七月元

子四月廿三日塚田ニ而用談、筋代桜竹御氏

一、丁銭拾九貫八百六拾八文　五馬市村

右は天保七申年、高木様御支配之節ゟ去ル戌六月迄諸色高直ニ付、御陣屋向御普請入用、余時入用口〻、郡中入用御取立、元銭無之御掛屋丸屋幸右衛門方借立之内、此節郡〻惣代申談候上、書面之通割賦相触申ル間、来ル五月十四日・十五日両日之内、丸屋幸右衛門方江御納可被成ル、御承知之上此廻状村名下御請印被成、早〻御順達、留リ村ゟ御返シ可被成ル、已上、

子四月廿一日　日田

会所　印

若殿様御入陣弥当月九日御着ニ御座ル二付、八日夕ゟ郷宿ニ御出、九日早朝関欤久喜宮辺迄出迎之事、尤御出迎之場所ハ、其内相聞可申ル事、万一右日限相違仕ルハハ、

早速御しらせ可申進段被仰付候、已上、

五月二日　御会所江逸右衛門ヲ以聞合事如斯

近来於諸国砂糖之製作追〻相増、大坂表其外国〻江積送リ高ノ多分之趣ニ相聞江、右ニ付而は自然本田畑江廿蓙を作リ米穀ニかへ、砂糖製作を専にいたしル儀は不可然事ニル、依之、自今以後猥ニ本田畑江廿蓙を作りル儀停止たるへくル、但、荒ノ地或は野山をひらき、米穀不熟之地江作ル儀は可為格別事、

右之通、文政元寅年相触ル処、近年又〻猥ニ相成、本田畑江廿蓙を作ル趣相聞不埒之事ニル、以来急度相守、本田畑江作ル儀は一切致間鋪ル、若相背もの有之ニおいてハ、吟味之上急度可申付もの也、右之通、文政元寅年、天保五午年相触ル通、弥可相守者也、

右之趣、御料は其所之奉行御代官、私領は領主地頭より入念可申付ル、

三月

右之通可被相触ル、

右之通、御書付出ル間、写遣しル、可被得其意ル、以上、

深　遠江守

明　飛騨守
内　隼人正

古文字金引替差出ゟ節、右金百ニ付、拾両宛其持主江被下ゟ内、引替所江諸入用相渡しゟ向も有之ゟ処、以来引替所江は別段引替諸入用被下ゟ、右金為引替差出ゟ持主江は、御触面之通、百両ニ付、拾両宛相渡ゟ筈、引替所江申渡しゟニ付、此上引替残之者も有之ゟハハ、右之心得を以聊不洩様、早々引替可申旨、支配所在町江可被申附ゟ、

三月廿六日

右之通、御書付出ゟ間、写遣之条得其意、小前末々迄不洩様可申聞ゟ、此廻状村下令請印、刻付を以早々順達、留村方可相返もの也、

子五月三日、日田御役所　印　苗代部村始　高取村留

午上刻出ス

五月六日丑下刻ニ新城村方請取
同寅上刻ニ小五馬村江継立申ゟ、

覚

一、駕籠　四挺
一、軽尻馬　三疋
此人足八人

右者拙者共儀、御用ニ付、豊後日田表江差越御用相済、明十四日出立、日州冨高江罷越ゟ条、宿々ニおゐて書面之人馬、御定之賃銭請取之無遅滞御差出可被成ゟ、且又渡船川越止宿等之儀も、差支無之様御取計可被成ゟ、此先状早々順達、冨高年番所江御達可被成ゟ、以上、

五月十三日　井出良右衛門
仁田脇　善助
原田　勘兵衛
渡辺忠左衛門

豊後国日田豆田町方
同国竹田返日州冨高迄
右宿々
御役人中
泊附

五月十四日　五馬市　同月十五日　宮ノ原

同月十六日　竹田　　同月十七日　重岡
同月十八日　延岡
追て泊宿ニ而ハ、上下六人分賄御用意置可被下ゟ、已上、
右十四日、上井手村ゟ請取出口村江継立申ゟ、

覚

日向国ノ臼杵郡冨高村之内新町
部当　良右衛門
同国諸縣郡塚原村　庄屋
忠左衛門
同国那珂郡吉村　庄屋
善助
同国児湯郡右松桟之内右松町　庄屋
勘兵衛

一賃馬四疋
右之もの共儀、御用書物為持、今廿一日日向国冨高陣屋差立、豊後国日田陣屋、夫ゟ豊前国小倉迄差遣ゟ条、宿村々ニおゐて得其意、書面之馬差出、賃銭請取之、無遅滞継送、渡船川越止宿等差支無之様可被取計ゟ、此添書付披見之上、右者共江可被相返ゟ、已上、

寺西蔵太手代
子四月廿一日　志賀守右衛門　印
近藤録八郎　印

日向国冨高ゟ
豊後国日田、夫ゟ往返
豊前国小倉迄　右宿村々
問屋
年寄　中

暉姫様御逝去ニ付、普請は今日ゟ来ル十二日迄、鳴物は来ル十七日迄、可為停止事、右之通可被相触ゟ、
五月
右之通御書付出ゟ間、写遣しゟ、可被得其意ゟ、以上、
五月八日　内　隼人正
明　飛騨守
深　遠江守
佐　長門守

右之通御書付出ル間、写遣シル、得其意廻状披見、当日ヶ普請は五日、鳴物は十日可為停止ル、右之通小前末ミ迄不洩様申通、此廻状昼夜刻付を以、早ミ順達、留村ヶ可相返もの也、

子十一月廿七日、日田御役所　印　苗代部村始　高取村留

五月廿九日午ノ上刻、新城村ヶ御継立、
午下刻新城村ヶ請取即刻小五馬村江継立申ル、

六月五日、大雨洪水ニ而、田畑損地多分有之、筋一紙ニ而七日御役所江御届奉申上ル、尤桜竹壱ヶ村損地無御座ル、当村届人組頭伝兵衛継、

其御村ミ当月四日ヶ五日迄格別之大雨ニ而川筋洪水之儀、田畑損所多少ニ不限御届可成ル御内意有之ル訳も有之ル間、川筋有之村ミ早ミ御届可被成ル、此状早ミ御順達可被成ル、以上、

子六月六日　会所　印　桜竹始　五馬市留

新城村ヶ十日受取

其村ミ前ミ江戸表評定所并於奉行所、裁許有之村方ニ、致所持ル裁許裏書・絵図・裁許下書・裁許証文有之ルハハ、写を差出、右本紙相添、来ル七月十四日迄可差出、且又右裁許証文は、十日来は為取替証文与認有之条、是又前同様写を差出、右本紙相添可差出ル、勿論於村ミ右裁許絵図并為取替証文有無之儀、廻状村下江令請印、早ミ順達可致、万一此書面ニ而難致得篤(ママ)村方は、村役人共之内事柄相弁ルもの壱人当、御役江罷出可相伺もの也、

子六月二日、日田御役所　印　苗代部村始高取村留
来ル十日新城村ヶ請取
十一日小五馬村江継立申ル

昨二日御仕出候御廻状之表、御承知之上、有無御廻状村各下江御請印ニ而、可然趣ニ有之ル得共、尚又被　仰渡ルは、有無共一村限リ七月十日迄書付ニ而、御断可申上旨、当所ヶ相触ル様被　仰渡ル間、此段御承知無御失念、右日限迄書付御差出可被成ル、此状早々御継立可被成ル、以上、

子六月三日　会所　印　苗代部村始

御廻状順達通

十日新城村ゟ請小五馬村江
十一日継立申ハ、

此節大雨洪水ニ付、郡〻村〻共損地御届相成ハ処、会所詰御召出之上、厳重被　仰渡、未夕時暇ニ付、田畑共可成丈出精致、根付可致旨被仰渡、且荒地御見分之儀ハ郡〻村〻之儀ニ付、御役所御手張ニ而、御出役様被遊御越之義、当村無之ハ間、精〻村役人手配致、壱歩たりとも起返、根付致ハ様御取計可被成ハ、此廻状早〻刻付ヲ以御継立可被成ハ、以上、

子六月八日　　会所　印　桜竹始
　　五馬市留
十四日新城ゟ請取

此度洪水ニ而、多分之損所出来いたし、村〻ゟ追〻御届け被成ハ処、田方稲草水押山崩等ニ而、一両年之内起返ニ可相成場所、此節専致手入、拾ひ苗又ハ貰ひ苗ニ而茂致シ植付ハ様精〻被　仰渡ハ、若地主計りニ而難起返分は、村中ゟ出夫いたし、成丈根付致シハ様、村役人ゟ精〻心配可致ハ、且又十歩一ニ相当リハ共、夫〻心ヲ掛ケ

等閑ニ決而致間敷ハ、縦ひ拾歩一ニ相当リハ共、容易ニ御引方難相立ハ、此段為心得会所ゟ可為相触知旨、厳重被　仰渡ハ、

一、用水井堰破損ニ而、通水無之分并道橋川欠ニ而、通路難相成場所は、早々村中申合、通水道橋差支不相成ハ様、精〻取計可申旨、是亦被　仰渡ハ、

右之通厳重被仰渡ハ、必無等閑御取計可被成ハ、此状村各下ニ刻付受印被成、早〻御継立可被成ハ、已上、

子六月十四日巳ノ刻出ス　会所　印苗代部始五馬市留
　　廿五日酉ノ刻新城ゟ
　　受取申ハ、

人足高　百三人　口奥両筋ゟ可出分、
一、人足弐拾人　　五馬市村
内
三人　舁添　麻上下大小六月晦日出
弐人　警固　麻上下大小六月晦日出
拾弐人　薄十五枚ニ代ル
但弐間ニして五婦あみ六月廿二日ニ納

弐人　葉付竹弐拾本ニ代ル六月廿六日納
是は注連竹ニ相成ハ間、末迄御葉竹御納可被成ハ、
壱人　御幣持六月晦日出
右者、当六月、大原山八幡宮御祓会諸入用書面日限之通不浄相改、人足明ヶ六つ時御差出可被成ハ、納もの日限通無間違御納、神宮寺大宮司江相断ハ様御取計可被成ハ、此状早ミ御順達、留リ村方即刻神宮寺江御差出可成ハ、已上、
子六月廿日　会所　印　印苗代部始五馬市留廿五日酉ノ刻新城方受取申ハ、

然は損地御見分御願之儀、村方極ミ取調申ハ処、先達而中御触茂御座ハ儀ニ付、村方ニ而手入取計御願之所は、新城・芋作両村共相止ハ筈ニ御座ハ、左様御承知可被下ハ、先頃本城出会之節、決着之上、否御互和合之筈ニ御談申上ハ間、右之段以書申上如斯御座ハ、已上、
七月八日　新城彦右衛門　芋作達平
五馬市　出口塚田本城

一、人足拾八人　五馬市村
薄簀拾五枚ニ代ル大原納
但壱間四ふあみ
弐間あみ
右者、大原宮八月御神事ノ諸入用物、日限之通御納可被成ハ、且御神事之節、出夫之儀不浄無之もの髪月代等いたし、無遅滞罷出、社宮寺大宮司江相断ハ様御中少も無間違御差出可被成ハ、
此触出早ミ御順達可被成ハ、以上、
子七月廿三日　八月十二日出口方受取　会所　印

覚
一、銀百貫目　初会鬮当限
内
三拾貫目　世話方江預ヶ置年壱割利付
七拾貫目　当九月可請取分
此分年壱割五歩利廻ニ相廻ニ相頼可申分
〆右辻
外弐拾貫目

是者壱番鬮当ニ不拘、世話方江願ヶ置、利銀ヲ以
会座諸入用相談、満座之上弐拾口江割合可受取分、
同拾貫目
是は二番会、右同断、満会之上、弐拾口江割合可
受取分、
此掛銀積書
一、銀六貫目　初会掛銀
此金九拾三両三分
但　金壱両ニ付、銀六拾四匁定
一、金拾五両
是は初座貫請ハニ付、諸家御役人中別段ニ一同取持
諸入用之積
一同、五拾五両弐分
是者初会鬮当リ銀外方江預ヶ置、利銀ヲ以懸出、壱
会ニ限、弐百五拾目宛不足ニ相成ハ間、別段ニ元金
取立備置ハ積、
〆金百六拾三両壱分
此訳
金六拾六両弐分　日田郡徳者中江
出会申談ハ積リ、
金弐拾五両　玖珠郡徳者中江
出会申談ハ積、
同拾五両　下毛郡　右同断
同五拾六両三分　当御陣屋付四郡
申談組会限リ
割合出金可仕ハ積リ、
〆右辻　初会入用手当
但　拾石ニ付、　銀六分壱厘宛
一、銀七貫目　弐番会懸銀
一、同壱貫五百目
是は、世話方江預ヶ置ハ銀三拾貫目、子九月ゟ丑
二月迄五朱利銀之分
一、同五貫弐百五拾目
是は、元銀七拾貫目年壱割五歩ニ而預ヶ置当九月
ゟ　丑二月迄七朱五厘利銀之分
一、同弐百五拾目
是ハ、別段ニ金五拾三両初会之節取立預ヶ至ハ利
銀年壱割五歩ニ相廻当九月ゟ丑二月迄七朱五厘利
銀之分
〆右辻

一、銀七貫目　　三番会掛銀

此訳

弐番会之通預ヶ銀三口利銀之分ヲ以掛出可申ハ、

一、四番会ハ満会迄掛銀　前同様利銀之分ニ而懸出可申事、

満会之節右金積

一、銀七拾貫目

是は、十ヶ年之間願ヶ置、利銀者懸銀ニ相用取銀之分

一、金五拾三両

是ハ、年〻懸銀不足ニ付、初会之節郡方取計ニ而取立会之内、五拾三両別段預ヶ置ハ元金之分

一、銀三拾貫目

是ハ、講座世話方へ預ヶ置、利銀者懸銀ニ相用元銀之分

一、銀壱貫五百目

是ハ、会座諸入用手当壱番会之節　銀弐拾貫目

弐番会之節銀拾貫目　講座世話方へ預ヶ置ハ分

弐拾口ニ割合　壱口分右辻

〆銀百壱貫五百目

金五拾三両

此分は満座之上　当御陣屋御普請入用ニ相用ハ積

覚

石井　竹田

一、金弐拾両　安左衛門　一、金五両　平右衛門

友田　万々金

一、同五両　久左衛門　一、同五両　六右衛門

万々金　くり林

一、同三両　宗助　一、同弐両弐分　彦右衛門

庄手　つる川内

一、同弐両弐分八左衛門　一、同弐両弐分　善八

中嶋　同村

一、同弐両弐分徳二　一、同弐両弐分　嘉左衛門

上内　北高瀬

一、同弐両弐分吉右衛　一、同弐両弐分　甚左衛門

寺内　上の

一、同弐両弐分善右衛門　一、金壱両　八左衛門

〆五拾七両弐分　　一、同　　石井　善右衛門
馬原
一、金壱両　小石衛門　一、同　陣屋廻　新吉
女ノ木
一、同　九兵衛　一、同　小迫　久市
はの
一、同　小右衛門
〆
合金六拾六両二分
子七月
右横帳上書講銀仕出帳

一、丁銀五貫百拾四文
右は此節御趣意ヲ以融通講郡方加入、初座懸銀之内、徳者出銀引残書面の通割賦相触申ハ間、来ル廿日迄丸屋幸右衛門預リ書を以、御納可被成ハ、勿論惣代ヲ以、演舌致し置ハ通、差懸リハ儀ニ付、右日限無延引御納可被成ハ、此廻状、村下江被成御請印、早〻御順達、留村方御返し可被成ハ、以上、　会所　桜竹始芋作留
子八月十日

一、玉子弐百　内百拾八納辻　五馬市村
但七文半当リ代銭受取
右は御陣屋急御入用ニ付、来ル七日迄ニ御納可被成ハ、差懸リハ御入用ニ付、右日限迄急度御納可被成ハ、此状早〻御継立可被成ハ、已上、　七日出口方受取
子九月四日　会所　印

覚

一、人足五人　内　山駕籠　貳挺　両掛　壱荷
一、賃馬四足
莚包　弐つ添
右は自分儀就御用、明後十九日朝六つ半時、豊後日田陣屋出立、日州富高陣屋江罷越ハ条、
寺西蔵太手付
御普請役格
子九月十七日　増井百助　印

右宿村々
役人中

休泊附

十九日　休出ハ　同日泊　宮ノ原
廿四日　御着冨高陣屋迄

一、銀弐貫五拾目　五馬市村

右は当子御年貢初納銀割賦、書面之通ハ条、来月十四日・十五日両日之内急度上納可致ハ、若不納村方於有之は、厳敷遂吟味ハ条、其旨相心得可申、此廻状村下庄屋令請印早々順達、留り村方可相返もの也、

子九月七日、日田御役所　印九月十七日新城村方受取

右村々
庄屋
組頭
百姓代

追而当子御廻米手本米、上中下三袋宛例年之通収納次第可差出ハ、以上、

其村々当子新田検見合付帳刈旬共早々書出ハ様可申遣旨被　仰渡ハ、差懸リハ儀ニ付、必無延引御書出可被成ハ、此状刻付ヲ以御廻ニ可被成ハ、以上、

子九月十二日　未ノ刻出ス　会所　印

自分儀就御用、明十九日豊後国日田陣屋出立ニ付、賃馬四疋之積先触差出ハ之処、賃馬七疋之積用意可被致ハ、追触早々順達、冨高陣屋江可被相届ハ、以上、

寺西蔵太手附

御普請役格　増井百助　印

子九月十八日

十八日申中刻、上井手方受取申ハ

豊後国日田方
日向国冨高迄
右宿々
問屋
年寄　中

其御村々、当子田方新田御検見ニ付、三判入用有之ハ段

被　仰渡ゟ間、三州御持参来ル廿二日御出勤可被成、日限御延引被成間敷、此状早〻御返し可被成ゟ、已上、

子九月十六日　　会所　印

桜竹始五馬市留

若殿様御儀、損地御見分として当月十八日玖珠郡戸畑村始、同廿二日湯山村御昼ニ而、馬原村御見分之上、万〻金村御泊リ之段、知せ来ゟ間、隣村之儀ニ付、御伺之思召共御座ゟハハ湯山村御房又は御通行筋御出勤可成ゟ、尤当村之儀は、御通行筋御座ゟ間、罷出可申ゟ、右知せ申上度如斯御座ゟ、已上、

子九月十六日　　桜竹新三郎

五馬市

本城塚田出口新城芋作出口ゟ十九日受取

其村〻貯穀割渡シゟ分、酉ゟ卯迄七ヶ年賦、并ニ去亥ゟ辰迄六ヶ年賦、可詰戻分之内且右之外新穀詰替之分共収納皆済、

穀類揃次第早〻届書可差出ゟ、

一、御買上御囲穀有之村方も、新穀詰替相済ゟハハ、是又届書可差出ゟ、右之趣得其意、此廻状村名下江令請印、早〻順達、留村ゟ可違返者也、

日田

御役所

子九月廿三日

苗代部、女子畑、大鳥、柚ノ木
湯山、赤岩、桜竹、本城、塚田、
出口、芋作、新城、五馬市

当子御米方出役之儀、其御筋内ゟ出役之積リ、先達而談之節申ゟ、追〻取調ゟ処、当年は其御筋内は出役順番外、小野筋ゟ出役ニ相成ゟ間、右ニ付、其御組合ゟは人当御書出不及、左様御承知可被成、右之段為念申遣ゟ、已上、

子十月十一日　　会所　印

本城良平殿同人ゟ別紙済

御米方之儀ニ付、御状拝見仕ゟ、然者出役之儀は「御遣も」御面談支度、尚又買替米願其外御出日限右出役願ニ付、惣代印判入用有之ゟ間、明後十五日迄之内、本城村良平殿印判御持参ニ而、御出勤可被成ゟ、右之段御報之上早〻如斯御座ゟ、已上、

十月十三日　　会所両人

芋作運平様

橋竹新三郎様

出口弥惣次様

五馬市村

一、銀九分六厘

右は其村〻去〻戌年江戸御廻米籾納方出張所入用銀割賦、書面之通仆条、来月十四日・十五日両日之内、御年貢ニ納一同急度上納可致仆、廻状村各下江庄屋令請印、早〻順達、留村方可相返者也、

苗代部始高取留、十月十九日新城方請取

同廿日小五馬江継立

子十月十五日、日田御役所　印

右村〻庄屋

組頭

百姓代

覚

一、人足九人

内

六人　山駕籠　三挺

弐人　出駕籠　壱挺

是ハ、宿方ニ而用意置可請仆

壱人　両掛　壱荷

一、軽尻馬八疋

右は我等儀家内一同、明後十八日明六つ時日向富高陣屋出立、豊後日田陣屋迄罷越仆条、

寺西蔵太手代　近藤録八郎　印

子十月十六日

子十月十八日　門川始

休廿三日　出口　同日御着日田御陣屋

子十月八日　御用談

一、御米方改之出役庄屋名前願之事、

一、御米津出日限願之事、十一月朔日方御願申上仆事、

一、長崎御廻米買替願之事

但弐万石之積

其外去ル申年夫食御拝借、年〻御返納御口米御年限中正

米納一同千四百石余
買替受負人之事、
但書付入ル
一、御米入用定例取立之事、十月廿日取立
一、去ル亥長崎御廻米欠減買納、三月筋限リ借立之分共
右入用不足一同取立之事、
但御米入用一同十月廿日取立
一、去ル戌年酉丸御炎上ニ付、御国恩冥加銀御上納之儀、
十一月八日九日、昨年通御上納申触置ハ得し共尚又
無間違様申談ハ事、

覚

〆銀弐百拾四貫八百拾壱匁七分八厘
内
銀拾五貫七百八拾三匁七分弐厘
是ハ去亥御米入用定式取立辻
残九貫弐百弐拾八匁六厘
此利壱メ八拾三匁三分七厘
合銀拾貫百拾壱匁四分三厘

外ニ弐厘懸る
此割御米高壱万百五拾石
但　米壱石ニ付
九分九厘六毛
一、銀七百四拾三匁壱分　奥五馬筋
内
金七両三歩弐朱
代銀四百七拾弐匁五分
此利五拾六匁七分　銀五匁五分九厘芋作分
〆五百弐拾三匁九分　此節納辻
差引銀弐百拾三匁九分
筋御米高七百六拾四石九斗八升四合　ニわけ
十月廿日御米入用一同納
壱石ニ付　弐分七厘九毛七
弐分八厘ニ而ハ弐分九リ已上
子十月廿日納
一、銀四拾五匁四分壱厘　五馬市村
是ハ去亥御廻米　減納不足塚田ニ而本城仕出シ辻
子三月納メ

松平伯耆守殿卒去ニ付、鳴物は今日ゟ三日停止、
普請は不苦ス、
九月十九日
右之通御書付出ル間、写遣之ル、可被得其意ル、以上、
九月十九日　佐　長門守
深　遠江守
明　飛騨守
内　隼人正
右之通御書付出ル間、写遣之心得其意廻状
披見当日ゟ鳴物は三日停止、普請は不苦ス、
右之趣小前末々迄不洩様申通、此廻状昼夜
刻付を以、早々順達、留村ゟ可相返者也、
子十月十七日　日田
御役所　印
苗代部始五馬市留
十月十九日新城ゟ申ノ刻請取
酉ノ上刻出ス
御役所納

一、丁銭拾九貫八百六拾八文　五馬市村
右は郡入用前割十一月朔日二日両日之内、丸屋預リ書を以
御会所納
子十月
一、銀弐百三拾八匁七分九厘　五馬市村
右は当子長崎御廻米四ヵ所納入用銀、書面之通割賦相触ル間、当月十九日・廿日両日之内、丸屋幸右衛門預リ書を以、御納可被成ル、此廻状村下御請印被成、早々御順達、留御村ゟ御返し可被成ル、
子十月九日　会所　印
右村々御役所中
一、銀百五拾壱匁八分五厘　五馬市村
右は去亥御年貢長崎御廻米御蔵納欠減買納代凡積を以当三月、筋限借立差立ル分并右不足銀其外納入用不足共一同割賦申触ル間、筋代中江申談ル通リ、当月十九日・廿日

両日之内、丸屋幸右衛門預リ書を以御納可被成ハ、此廻状村名下請印之上、早ミ御継立、留リ村ヲ御返可被成ハ、已上、

子十月九日　　会所　印

壱朱金之儀、去亥十月相触ハ通、当子十月ヲ弥通用停止ハ間、停止以後堅通用致間敷ハ、尤遠国其外無格引替残も可有之欤ニ付、停止以後も所持之者は是迄引替所江早ミ差出引替可申ハ、如斯停止以後通用いたしハ欤又は貯置不引替もの於有之は吟味之上急度可申付ハ、右之趣可被相触ハ、

七月

右之通御書付遣ハ間、写遣しハ、可被得其意ハ、以上、

八月晦日　　佐　長門守
　　深　遠江守
　　明　飛騨守
　　内　隼人生

右之通御書付出ハ間写遣シ条得其意小前末ミ迄不浅様可申聞セ此廻状村各下江令請印、早ミ順達、従留村可相返もの也、

子十月　日田御役所　印　　苗代部始五馬市留
　　十月晦日新城ヲ請取

一、銀拾匁四分四厘　　五馬市村

右は去亥御年貢銀江懸ハ納入用凡積取立置ハ内、江戸大坂入用之分引之、可割返分書面之通ハ条、当子二納之節、請取之者印形持参可相届ハ、尤返銀之儀は、小前末ミニ至迄、無高下割返可致ハ、廻状村下江令受印、早ミ順達、留村ヲ可相返もの也、

子十月廿一日日田御役所　印　苗代部始高取留リ
　　十一月朔日、新城ヲ請取
　　同日小五馬江継立申ハ、

五馬市村

当子

一、買替米弐拾六石
又同弐拾石　返預申上ハ分
一、買替米九石五升　新城　一、同四石也　芋作
一、同弐拾九石也　出口　一、同弐拾石　塚田
一、同弐拾壱石五斗　本城　一、同拾六石　梅竹

当子御年貢長崎廻米津出、来十一月朔日ゟ十二月廿五日迄、惣皆済被仰付ゟ間、右朔日ゟ津出いたしゟ様、御村〻共小前無洩落、御申触可被成ゟ、右御日限ニ不拘、早〻皆済相成ゟ様、精〻御取計可被成ゟ、尤米拵は勿論綱俵拵等極〻入念相納ゟ様厳敷御申付可被成ゟ、

一、御米内札之儀、是迄之通相認初川下ニ差支無様、御出可被成、未タ御出役様御名前相分リ不申ゟ、

所〻出役庄屋名前書

友田平左衛門
中城詰　十二町藤九郎
求来里富右衛門
苗代部祐右衛門
〃
関詰　南高瀬彦左衛門
高野助六
〃
馬丞詰　出口弥惣治
〃

差入申証文之事

一、丁銭　何拾何貫文

是者何入用　天保何何月或日納不納之分

右は当村諸出銭上納之内、小前取立方行届兼、書面之通上納不足ニ相成、是迄度〻組合惣代立会之節御催促被成下ゟ得共、中年追操之末ニ而必至差支、何分此節上納皆済出来兼ゟ間、此上御猶予難申入ゟ得共、何卒格別之御了簡を以書面滞之内、半方十二月廿日納、相残ゟ半方、来丑二月廿日納、両度急度相納可申ゟ、依之為後日三判証文差入申ゟ処、如件、

天保十一子年十一月　三判

会所詰

上井手村庄屋
惣右衛門殿
用松村庄屋
兵衛殿

当子石代直段

一、米壱石ニ付　銀六拾七匁五分四厘弐毛

一、大豆壱石ニ付　銀六拾五匁三厘七毛
一、口米壱石ニ付　銀七拾弐匁分四厘弐毛

一、米百八石三斗七升九合　五馬市村
　米百七石三斗六合　本米
　内
　米壱石七升三合　欠米
外ニ米四拾六石四斗六升　買替米
　米四拾六石　本米
　内
　米四斗六升　欠米

右は当子御年貢長崎御廻米一村限割賦、書面之通取立改として我等儀、関河岸江致出役仆条、於村々得其意、早々津出可被致仆、且俵拵皆済日限等之儀者、都而先達而相触仆通相心得、諸事入念取計、尤日割ニ不拘天気次第出精皆済可被致仆、此廻状村名下ニ令受印、早々継立、留村方関河岸御用先ミ可被相返仆、已上、

関河岸出役
寺西蔵太手代

子十一月十二日　近藤録八郎　印
苗代部村始五馬市村留
十一月廿三日新城方受取

一、米七石四斗壱升　五馬市村
　此欠　弐斗弐升弐合　江戸御廻米
一、同五石弐斗弐升　夫食返納
　此欠　壱斗五升七合

〆

右は当子江戸御廻米并去ル申年夫食御拝借被　仰付仆分、去亥方来ル卯迄五ヶ年賦、当子返納、江戸御廻米、書面之通御上納被　仰付仆間、右江戸御廻米之分本欠之外ニ、石弐拾目相添、長崎御廻米一同、中城御蔵所江附出、早々皆済可被成仆、此廻状村名下御受印ニ成、刻付ヲ以御順達、留村方御返し可成仆、已上、

子十一月十五日申刻出ス　中城
御蔵所　印

村々

御役所中　子十一月廿三日新城ゟ受取
廿苗代部村始本城村留
一、御出役近藤録八郎様御名前内札江御書入御差出可被成、決而無延引様、精々御取計御差出可成ゆ、

覚

一、駕籠　壱挺
此人足弐人
一、軽尻馬　壱疋
右は就御用拙者儀、明廿六日豊後日田出立、日州冨高江罷越ゆ間、書面之人馬御定之賃銭請取之、無遅滞御差出、且渡船川越止宿等差支無之様御取計可給ゆ、尤御添触所持之、入披見可申ゆ、此書付早々順達、冨高年番所江御達可被成ゆ、以上、
日州冨高
御銀宰領
子十一月廿五日　日知屋新石衛門　印
泊り　泊り
豆田町　出口　宮ノ原　久住
泊り　泊り
竹田　宇田技　小野市　重岡
八戸　河内名　長井　川嶋
泊り
延岡　伊福形　門川　新町
右宿々
御役人衆中　子十一月廿六日八つ半時続木村
請取即刻出口村江継立申ゆ処、迄引ニ
相成、此状御差返シニ相成、又々郎刻
続木村江向当村ゟ差返申ゆ、
一、丁銭五貫三百五拾七文　五馬市村
右は呉崎新開御仕立中御郡代様并御出役様御越御往返人馬賃其外、御休泊入用、下毛郡銀難渋之旨、去ル未年御願ニ相成、其節熟談之上、右入用之内、銀五百目弐拾ヶ年賦同郡江可相渡分　十一月十四日・十五日丸幸預リを以御会所可納分、
子年分高松年賦
一、銀拾壱匁七分八厘　五馬市村

子十一月廿四日　日田御役所　印

十二月三日新城ゟ請取

一、銀三貫弐百弐匁壱分九厘　五馬市村

右は当子御年貢三納銀割賦、書面之通ゟ条来月十四日・十五日之内、急度上納可致ゟ、若不納村方於有之は、厳敷懸吟味ゟ条、其旨相心得、此廻状村下庄屋令請印、早〻順達、留村ゟ可相返者也、

子十一月廿二日　日田　御役所　印

十二月二日新城村ゟ請取
三日小五馬村江継立申ゟ

去ル申年夫食御拝借被仰付ゟ御返納米之儀、去亥ゟ五ヶ年賦被　仰付、去亥壱ヶ年御取立、当子年延、来ル丑ゟ右残米之分、廿五ヶ年賦御返納被　仰渡厚御慈悲之段、小前一統不洩様御申諭可被成ゟ、尚又小前惣連印御受印形証文之儀は追〻節代ゟ委細申談ゟ間、此段御承知之上、早〻御順達可被成ゟ、以上、

子十一月廿六日　会所　印

苗代部始五馬一留
十二月二日新城ゟ受取

上書

飢夫食米拝借返納永年賦御請書

何国何郡何村

差上申御請証文之事控へ

天保八酉年拝借

米何石弐拾六石壱斗　戌ゟ寅迄五ヶ年賦之処戌壱ヶ年迄
但亥ゟ卯迄五ヶ年賦壱ヶ年米何石
○返納之積　○米五石弐斗弐升

内米何石五石弐斗弐升　去亥年返納相済ゟ分

一、残米何石弐捨石八斗八升　飢夫食拝借返納

但　当子壱ヶ年延来ル丑ゟ来ル丑迄弐捨五ヶ年賦、
壱ヶ年米八斗三升五合弐勺宛返納之積

右は諸国村〻百姓共江拝借被仰付ゟ夫食種籾農具代等之儀は、水災其外不作之節、御救として拝借被仰付ゟ儀ニ有之ゟ処、近年不作之年柄打続ゟ故、拝借高相嵩、返納難儀之趣相聞ゟニ付、此度夫食種籾農具代拝借米金銀返納残之分、不残当子壱ヶ年延、来丑ゟ弐捨五ヶ年賦返納被仰付、右之通村〻御救として格別之訳を以、年賦返納被仰付ゟ間、耕作等出精いたし、村柄立直ゟ様無油断相励可申ゟ、勿論右之通被仰付ゟ上、又ゟ拝借相嵩ゟ様ニ

而は、詮も無之事ニ付、以来拝借は、容易ニ被仰付間敷
ハ間、兼而水災不作等之年柄之手当心懸、其節ニ至リ不
及難儀様可致ハ、右躰寛大之　御慈悲を以御救之儀被仰
出ハ上は、無心得違銘ゝ質素倹約を堅相守、自力ニ取続
ハ様可致旨被仰渡ハ、
右之通被出ハニ付而は、私共村方去ル申年凶作難儀ニ付、
飢夫食拝借五ヶ年賦返納之積被仰付ハ分、当子壱ヶ年延、
来丑ゟ弐拾五年ヶ年賦返納被仰付ハ間、御趣意之趣難有
相心得、聊違失不仕書面割合之通、年賦返納仕、農業出
精いたし、凶災之手当可心懸旨被仰渡、一同難有承知奉
畏ハ、依之惣百姓連印御受証文差上申ハ処如件、

当御代官所

天保十一子年十一月　　何国何郡何村

何村百姓　　印
百姓代　　印
組頭　　印

庄屋　　印

寺西蔵太様
御役所

覚

米弐拾六石壱斗　　五馬市村夫食米之辻
内五石弐斗弐升　　納済
一、米弐拾石八斗八升　　五馬市村
但、天保十一子壱ヶ年延、翌丑ゟ丑迄廿五ヶ年申
壱ヶ年米八斗三升五合弐勺つつ返納之積

昨八日筋代御用相勤ハ処、当子三納銀之内三分通、来
三月迄月延、残リ七分通此節御取立御聞済ニ相成申ハ間、
左様御承知可被成ハ、
一、当子御直段之儀ニ付、御役人様其外会所両人掛屋御
用達御心配ニ付、郡方ゟ取計ハ割賦、別紙之通、当
御上納一同会所江御納可成ハ、
一、去亥御年貢銀納入用御割返、江戸御廻米籾納出張所
入用御差引、当月御上納之節、筋代江御渡ニ相成、

右ニ付、去亥御銀御通御入用ニ付、当月十三日迄桜竹新三郎殿方江御遣シ可被成ハ、尤差懸リハ儀ニ付、早ミ御順達可被成ハ、已上、

十二月九日　　本城良平

橋竹始新城芋作五馬一出口塚田留、九日新城ゟ請取

一、銀弐拾七匁四分壱厘　　五馬市村

是ハ右ニ有之去亥御年貢銀納入用御割返之分、

古金銀真字弐分判古弐朱銀等、引替所之儀、当子十一月迄被差置ハ段、去亥年相触ハ処、今以引替残有之ハ間、引替所之儀、猶又来ル丑十月迄は是迄之通被差置ハ条、古金銀其外所持之ものは、来ル丑十月限リ急渡引替可申ハ、

一、草字弐分判ㅂ文政度吹直し弐朱銀之儀も、追ミ相触ハ通、所持之者は早ミ差出シ引替可申ハ、

一、文政度吹直し金銀之儀も都而通用停止可被仰出ハ間、聊不貯置、此節精出引替可申ハ、

右之通遠国末ミ迄相心得ハ様、御料は御代官領主地頭江入念可申付ハ、以上、

十月

右之通可被相触ハ、右之通御書付出ハ間、写し遣しハ可被得其意御、以上、

十月十七日　　梶　土佐守　佐　長門守

深　遠江守　明　飛騨守　内　隼人正

右之通御書付出ハ間、写遣しハ条、得其意、小前末ミ迄不洩様可申聞、御廻状村名下江令請印、早ミ順達留村ゟ可相返者也、

子十二月　日田御役所　　苗代部始高取続

木十二月十日受

小五馬村江継

其村ミ当子長崎御廻米津出シ之分相改ハ処、日増ニ米拵不宜、中城河岸ニおゐて手直し申付ハ得共、餘類之俵数之儀不行届分も有之、第一納米其外自然と不益之儀有之ハ間、此末小前壱人別ニ米拵入念ハ様精ミ申渡、津出皆済可致ハ、右躰申触ハ而も、等閑之村方於有之ニ者、急度及沙汰ニハ間、其旨相心得、此廻状不限昼夜ニ刻付ヲ以、早ミ順達、留村ゟ関河岸詰所江可被返ハ、以上、

関河岸出役

子十二月九日　寺西蔵太手代
近藤録八郎　桜竹始五馬市留

覚

一、銀九分六厘
一、同廿七匁四分壱厘　五馬市村
〆廿八匁三分七厘
内拾匁四分四厘
〆拾七匁九分三厘　子十二月十五日桜竹俊五郎様ゟ
相納請取書かへ江有之ゟ、

諸国酒造之儀、三分二減石可致旨、去ル申年相触ゟ処、追〻米穀も潤沢いたしゟ趣ニ付、追〻改沙汰ゟ迄ハ、去ル巳年以前迄造来米高之内、半高相残、半高酒造可致ゟ、尤其国柄ニ寄、減造申付ゟ儀は勝手次第ニ相心得、隠造過造等無之様、精〻心付、弥厳重ニ致方可申付ゟ、若隠造過造等致ニおゐては、其者は勿論、其所之役人迄吟味之上、急度可申付条、心得違無之様可致ゟ、

右之趣、御料私領寺社領共、不洩様早〻触可相知もの也、

子十一月

右之通、御書付遣ゟ間、堅相守可申、万一等閑相心得ゟもの於有之は、厳敷逐吟味条得其意、酒造人共江不洩様急度可申聞ゟ、廻状村下令請印、早〻順達、留村ゟ可相返もの也、

子十一月廿三日　日田
御役所　印　苗代部始続木留
丑正月二日新城ゟ受け取
三日小五馬江継立

昨日御不予御養生不叶、去十九日被遊　崩御ゟニ付、普請鳴物、今日ゟ来ル廿八日迄停止之事、
右之通可被相触ゟ

十一月廿四日

右之通御書付出ゟ、御　遣しゟ、可被得高意ゟ、以上、

十一月廿四日　梶　土佐守
佐　長門守
深　遠江守

明　飛騨守
内　隼人正

右之通、御書付出ゟ間、写遣し条得其意、廻状披見当日ゟ普譜鳴物五日停止ゟ、右之趣小前末〻迄不洩様申通此廻状昼夜刻付を以、早〻順達、留村ゟ可相返者也、

子十二月十七日、日田

御役所　印　苗代部村始五馬市村留

丑正月十一日新城ゟ受取

一、当子新田検見之儀、北高瀬内誰合願ニ付、同村ニ而御見分之節、御内分御足軽衆御手廻リゟ御仕法之儀、毎〻御仕法有之、右ニ付、御足軽衆御三人へ弐百疋つ〻、御手廻リ衆へ百疋つ〻惣而都合千疋十八ヶ村〻割合、五拾目つ〻ニ相当リゟ間、今日飛脚差立ゟ積之処、幸便ヲ以申上ゟ間、早刻御筋内分御取立御仕向可被成ゟ、左之通、

覚

一、五拾目　新城
一、同　芋作
一、同　五馬市
一、同　出口
一、同　塚田
一、同　本城
一、同　橋竹

〆三百五拾目

一、近年御内意之年替年始御足軽御門へ一村壱朱っつ之儀、是又昨年通正月御祝儀之節迄御取替御筋内御仕可被成ゟ、

（以上）